

関学英文学科がくれた「出会い」

高橋路子

(1999年度 M, 2004年度 D)

私が初めて上ヶ原キャンパスに足を踏み入れたのは、大学4年生のときでした。大学院を受験する前で、杉山洋子先生にお目にかかるためでした。向かった先は、文学部二階の英文研究室でした。ちょうど大学院の授業が終わる時間と重なっていたようで、私が部屋の奥にあったソファに座って先生が来られるのを待っていると、副室から院生の方々がぞろぞろと英文研究室に入ってこられて、たちまち研究室はにぎやかになりました。院生の人数の多さにも圧倒されましたが、みなさんが楽しそうに談話されていたのが印象に残っています。その時は、半年後に自分がその英文研究室で教学補佐をすることになるとは想像もしていませんでしたし、はたまた、あれから20年近く経った今こうして当時の思い出について書くことになるとも想像していませんでした。

あれからもう20年近くになりますが、さほど時間が経ったという実感がないのは、大学院で出会った先生方や友人の存在が今でも自分の支えとなっているからだと思います。関学英文学科で私が得たものは何であったかと問われれば、迷わず「多くの大切な出会い」と答えるでしょう。

そもそも、私が関学に進学することになったのも不思議な縁に導かれたのでした。私は神戸女学院大学から関西学院大学の大学院に進学したのですが、女学院では難波江和英先生との出会いがありました。難波江先生の授業で学んだことは私が研究の道を志すきっかけともなりましたし、ヴァージニア・ウルフに関心をもつようになったのも難波江先生の影響です。二年生のときに先生の授業でウルフの *The Waves* を読んだのですが、読み進めていくうちにウルフの独特な世界に思わず引き込まれてしまいました。

そして、私がウルフの作品と出会ったのとほぼ同じころに、もう一冊の大切な本との出会いがありました。杉山洋子著『ファンタジーの系譜』です。杉山先生のご著書は、私が勝手に作り上げていたウルフ像を覆し、ウルフの新しい側面を私に気付かせてくれました。大学院に入って、杉山先生の指導を仰ぐようになってからも、先生の授業は常に新しい発見の連続でした。

例えば、ウルフの作品は難しいと私が思い込んでいたとするならば、「ウルフって面白いでしょ」という杉山先生の一言があって、それまでウルフの作品を魅力的とは思っても面白いと感じたことがなかった私としては、もっと色々読んでみなければという気にさせられました。また、修士課程一年のときには、先生の薦めで読んだ *The Mennymys* というある人形一家の話を描いたシリーズが院生の間で大流行りしたこともありました。

杉山先生からは常に新しい発想と複眼的視点から物事を捉えるという研究者としてあるべき姿勢を教わりました。しかし、何よりもウルフの面白さ、そして文学研究の奥深さを感じさせてくださったのは杉山先生です。私にとって杉山先生は大きな憧れであり、偉大な先生のもとで学べたことを何よりも幸せに感じています。そして、全くの偶然なのですが、恩師の難波江先生も関学出身で、杉山洋子先生が難波江先生の指導教授でもあられたというのは大きな驚きであり、不思議な縁を感じずにはいられません。

難波江先生との出会いが、関学の杉山先生との出会いへとつながっていたとするならば、杉山先生との出会いは福岡忠雄先生との出会いを私に与えてくれました。福岡先生は杉山先生の後任として関学にいらっしゃいました。福岡先生の現代批評の授業はいつも活気がありました。授業では特に構造主義について色々読みました。なかでも、先生お薦めのデイヴィッド・ロッジ著 *Changing Places* はまさに傑作です。現代批評の難解なテキストも楽しんで取り組むことができたのは、福岡先生が分かりやすく解説してくださったということもありますが、先生の気さくなお人柄のためであったと思います。当時の授業の様子を思い返してみても、思わず笑みがこぼれます。

福岡先生には長年にわたり指導教授としてご指導いただき、今でも学会や

研究会などでお世話になっています。とくに修士課程を修了後、大学院を離れていた私を励まし支えてくださった福岡先生には心から感謝しています。福岡先生のご指導の下で、博士論文を提出できたことも大きな幸せです。

院生として、そして、その後は研究員として上ヶ原で過ごした時間は、十数年ほどです。その間、杉山先生、福岡先生の他にも多くの先生方にお世話になりました。また、多くの尊敬できる先輩や友人たちとも出会いました。関学での多くの出会いに感謝しつつ、かずかずの縁をこれからも大切にしていきたいと思っています。

